

あなたが子どもの頃に抱き続けた夢は？ アスリートが子どもの頃に見ていた夢、そして夢を持つことの大切さを語る「夢を信じて」。インタビュアーはコラムニストのえのきどいちろうさんです。



— ボクシングは何歳から？

内藤 小さいときはまったく興味なくて。中一の終わりの2月に親父のジムができて、親父もお母さんもジムにいるので、「学校終わったら、直接ジムに帰ってきて」と言われて。ジムに帰ってくるようになって、やることないんで練習を始めた…という感じです。

— ジムを始めなかったらボクシングをやってなかったことですか？

内藤 やってなかったと思います。

— ある日、自分の親がボクシングジムを始めたばかりに。これ大変ですね。

内藤 それまでは野球少年でした。でも、ボクシングは自分一人が頑張ればついてくるし、自分がやらなきゃ勝てないんで、そんな感じでだんだん面白くなってきました。

— やっぱりさすがカシアス内藤さんの息子さんだ…という風に見られたと思うんですけど。中学生くらいだと反抗期とかで、親から距離を置こうとしたり、反発したりとかいう時期じゃないですか。

内藤 そうですね。でも反抗期の頃はもうボクシングが面白くなってきて、親父も教えてくれるし、親父を指導者として尊敬する存在として見ていたかもしれないですね。小学校の頃はただの優しい親父でしたけれど、ボクシング始めてからは本当にすごい人だったんだというのが分かってきて。

— お父さんがビッグネームで『一瞬の夏』(沢木耕太郎著)のイメージ。その息子だて見られるの、重くなかったですか？

内藤 あんまり感じてないですね。みんなに見られるから嫌だな、とかはないですね。「あれは会長…内藤さんの息子さんだからボクシング強いんじゃないの」って目で見られてたし、プレッシャーに感じたこともあります。でも、それより頑張ってるぞ、やってやるぞと思った回数の方が明らかに多いです。

— ジムを始められるにあたって、お父さんはガンのごことを告白されて、メディアにもそのことが載ったじゃないですか。それは指導者という面もあるけど、親子という事というすごいキツイですよ。

内藤 でも、そんなに心配しなかったんですよ。初めてがんセンターにお母さんとか行った時に親父がガンだと知らされて。その時親父に「お前が家族を支えてってくれ」って言われたんですけど、その時も「お父さんいなくなっちゃうのかな」…とか思わなかったし、そこを深く考えるとかはなかったんです。もちろん、親父が生きている間に夢を叶えたいなと思ったこともありますけれど。親父が頑張っているから俺も頑張る…頑張るっていうか「自分は自分で頑張ろう」という気持ちになりましたね。

— 先日の後楽園ホールで試合前に会場の様子とか見て回っていたんですけど、律樹選手めっちゃ友達多いじゃないですか。仲間とかいっぱいいる人だなんて見てたんです。



内藤 自然と増えてきた感じなんです。ボクシングで活躍できてからは、いろんな人に話しかけられるようになったし、周りがかすごく大きくなってきたなあとは感じてます。

— チャンピオンですから。

内藤 あいつが頑張っているから俺も頑張ろうと応援してくれる人が増えるというのはすごい感じますね。

— 会場には沢木(耕太郎)さんがいらっしやったり、この人『一瞬の夏』絶対読んでるなっていうファンもいっぱいいて、思い入れをもたれがちですよ。『一瞬の夏』は読みました？

内藤 いや、僕読んでないんですよ。

— 理由があって読まない？

内藤 何も理由はないんですけど、いっかい本を開いたことはありますけど、すぐやめちゃいました。別に読まなくてもいいかなって。自分が選手を終わってから読みたいかな

るのかもしれないですけど、選手である間は読むことはないと思います。

— このジムもそうですけれど、学校の部活と違って町のジムには律樹選手のようなチャンピオンもいるし、たとえば「やってみようかな」みたいな少年もいて、それってすごいことだと思うんです。少年野球とプロ野球と一緒に練習をやっている感じ。

内藤 ボクシングってほかのスポーツと違いますね。

— 身近な所で律樹選手のチャレンジを感じられるみたいなのはすごいなって思う。

内藤 子どものいるときはサボれないですね。そこら辺でお菓子食って寝てるんじゃ、「なんだ」って言われちゃいますからね(笑)。以前は「ここでやらなきゃいけない」って時にやらなかった時もあったし。

— 僕は『一瞬の夏』を読ませてもらっているから、本の中でエディ・タウンゼントさんとカシアス内藤選手のロードワークをサポート話とかあるんですけど、そういうのとかが連想しちゃうなあ。そうか(笑)。

内藤 一緒だと思います(笑)。でも、やっぱりボクシングが好きなんです。この気持ちだけは絶対誰にも負けないし、誰と話しても、どこに行っても、どんな状況になっても、絶対変わらないと思います。

— この先、どんなボクサーになりたいですか？

内藤 僕は世界タイトルとか正直興味ないんですよ。親父の夢だとか、そういうのも全然興味ないんです。誰もがあいつすごいな、強いなって言ってくれる、そして誰からもカッコいいって思われるようなボクサーになりたいですね。八重樫東選手とローマン・ゴンザレスの試合(2014年9月・WBC世界フライ級タイトルマッチ)がそうだったじゃないですか。あれだけの人が感動したと言ってくれる。そういうのは勝ち負けじゃないと思うんですよ。世界タイトルとか、タイトル持つ持たないとかでもない、ああいう選手になりたいって思われるようなボクサーになりたいですね。

— お父さんもそうなんですよ。みんな忘れられないんですよ。素晴らしいボクサーなんだ。みんな覚えてる。記憶に残るってことはそういうことなんですよ。



PROFILE プロフィール

内藤 律樹(ないとう りつき) プロボクサー。1991年7月31日生まれ。横浜市出身。第45代日本スーパーフェザー級王者。父は、元日本ミドル級王者のカシアス内藤。父親が会長を務めるE&Jカシアス・ボクシングジム所属。磯子工業高校3年の時、ライト級で高校三冠を達成。その後、プロの舞台へ。プロ通算、9戦9勝(5KO)。

取材を終えて

「ボクシングの申し子」という感じがしました。中学時代のある日、お父さんがジム経営を始めてしまうんだ。お母さんも仕事を手伝って、つまり、家庭にボクシングが入ってくる。なかなかそんな境遇の人はいませんね。しかも、お父さんは伝説の名ボクサー。内藤律樹選手はその境遇のなかで、実にまっとうに成長した。日本チャンピオンに輝いたけど、もっとしびれる試合がしたいと思ってる。これは応援せずにはいられません。

